

黒人教会の成立と変容

松岡 泰

はじめに

宗教関係の本を読んだのは、助手の時に一年間読んだのが最初で最後で、それ以来十五～六年ぶりですので、何が何だか全然わからないという状況です。特に、神学関係になりますと、まったく基礎知識がなくてわかりませんので、歴史の方に逃げていこうということです。今日触れますのは、黒人と宗教ということで、黒人教会についてお話しする予定です。

黒人教会というのは、ほとんど馴染みがない言葉だと

思います。全く偶然ですが、私は黒人教会の雰囲気に一回だけ触れたことがあります。それは二十年ほど前に日本で、わたしの知り合いから券をもらつてイギリスの有名な聖歌隊を聞き、その翌週に、また別の聖歌隊を聞きに行つて、それが偶然ゴスペルソングだったわけです。

あまりに雰囲気が違うので、びっくりしたのを覚えていきます。イギリスのは、中学生から大人まで何十人かがかもしだすハーモニーがとてもきれいで、整然とした雰囲気に包まれていたのですが、その翌週に聴いた黒人教会のは、ドラムにトランペット、そしてみんな体を揺らし

て歌ったり踊ったりするので驚いたわけです。それが今から思うと黒人教会の雰囲気だったと云うことです。

[1] 教派への所属

「承知の通り、黒人が所属している教派は、ほとんど

バプティストかメソジストです。黒人のメソジストの(1)大教派は、(a) African Methodist Episcopal Church, (b) African Methodist Episcopal Zion Church, (c) Christian Methodist Episcopal Church で、名前が少し変わっています。イギリスの教会を意味するエピスコパルに、メソジストという名前が付いています。これは、ある意味ではアメリカの黒人教会の歴史を表してくるようになります。南部にはもともと貴族主義的な文化を含めてイギリス的な伝統が強く残っており、それが教会の教派にも表れております。元来は、エピスコパルが比較的強かつたわけです。[2] で触れますように、南北戦争が終わり南部に黒人の教会が作られるときに、組合教会とかエピスコパルとかプロテスタントとか、北部の教会の宣教師たちがたくさんやって来て、黒人用

の教会を作るわけです。とりわけメソジストの影響が非常に強くなつて、エピスコパルという名称の前にメソジストと云うのがくつついて、こちらのほうが主流になつたのです。そういう意味では、名称が黒人教会の歴史を表していゆわけのです。

最初の African Methodist Episcopal Church は(1)番田の African Methodist Episcopal Zion Church はメソジストではなくむしろ黒人の上層階級の人が主体の教会です。三種類の Christian Methodist Episcopal Church には現在ではアフリカ人といふ用語は使われておせんが、もしももこれは Christian ではなく Coloured Methodist Episcopal Church で、名前だけ白人には九六〇年代くらいまではできるだけ白人的なもの、あるいは白人文化がよいという発想が強かつたので、とりわけ黒人の中産階級にはその傾向が強かつたため、この階級の人から主として構成されていたこの教会は、この Coloured といふ呼び名を Christian に変えてしまつたのです。どちらだけ黒人的なもの、あるいはアフリカ的

なものを排除しようとしましたわけです。したがつて、これら「黒人教会だと云うのがよくわかる名稱」になります。

またバプティストの教派があります。(1)

National Baptist Convention, USA. と(2) National Baptist Convention of America は、主として下層階級の信徒で構成されています。[3] Progressive National Baptist Convention には中産階級の信徒が多いため、Progressive といふへんなちよいとこロマンスが違う表現になつております。これらは云々それも黒人教会(Black Church) と云われるのです。この教員はほぼ全員黒人です。

アメリカでは日曜日の午前中、人種がいちばん分離するといふと云われます。ところは、白人は白人の、黒人は黒人の教会に通うからです。要するに、人種によつて所属教会が完全に異なるので、日曜日の午前中がいちばん人種が分かれる時間帯になるのです。

ですから、この時代には黒人教会というのはありません。黒人の場合も、白人の教会に基本的には通います。

[2] 南部における〈黒人〉教会(Black Church) の成立について

(1) 奴隸制時代の教会

「ハア、どうぶつに、黒人は普通は黒人だけの教会に所属するわけですが、昔から黒人教会が存在していたかといふと、実はそうではありません。奴隸制時代には、黒人教会といふものはありません。ところは、奴隸制時代といふのは、人種を分離する時代ではないからです。奴隸制とは白人と黒人がともに一緒に生活する、同じ空間で共存する、そういう体制です。『風と共に去りぬ』という映画の中で、黒人のお婆ちゃんが娘を棄ける場面がありますが、白人の家のなかに黒人の乳母がいたり召使いたりして日常的に接觸しています。そもそも白人の子弟といふのは大体黒人の乳母の乳を吸つて育つというものが普通で、白人と黒人の接觸が非常に密なのが奴隸制時代です。

白人の教会の後部座席あるいは二階が黒人用になつていて、そこに行つて白人用の説教を聞くというのが普通です。白人の教会に通えない場合はどうするかといいますと、南部の大プランテーションですと、プランター

が敷地内に奴隸用の教会堂のようなものを設立します。たゞ、大プランターというのは一般の予想に反してほんの一握りの数パーセントしかおりません。ほとんどの場合は、一つの家庭に奴隸が二~三人から四五人ですので、そういう場合は、プランターの奥さんなり子供、娘が黒人に説教するというのが普通です。いずれにしろ、白人と一緒に説教を聞くスタイルです。

一方で、奴隸は白人の教会に通つて白人の説教を聞くわけですから、それと同時に奴隸だけが深夜に集まって開く集会もありました。夜中に奴隸だけで集まつて集会を開いて、そこで仲間のだれかが説教者になつて熱狂的な状態になつていく、そういう教会、形のない教会(Visible Church)というのが他方にありました。白人の教会は厳格で形式張っていたのに対し、この秘密の教

会のほうは陶酔性とか興奮状態というのが特徴でした。黒人の場合、特に沿岸部の大プランテーションに属する黒人奴隸には、両方に所属する人も結構いたようです。これが、奴隸制時代の教会です。

ひとこと付け加えますと、奴隸制の時代にキリスト教は黒人に対しても布教されていますが、キリスト教を黒人奴隸に教えてよいのかその是非をめぐつて議論がありました。積極的に黒人にキリスト教を普及させようとする人たちと、そうではなくて、やはりキリスト教は神の前の平等を説くので危ない、危険思想だから奴隸反乱の温床になると言つて、それに躊躇する人もいました。地域によつて、その受け入れ方はかなり異なつているようです。たゞ全体的には、キリスト教を教えたほうが奴隸は勤勉になつて生産性が上がる、あるいは秩序意識を持てるようになるから奴隸反乱を抑えることができるという理由で、奴隸にキリスト教を教えるのが多かつたようです。この時代、黒人奴隸にキリスト教を教えるときの説教の要点は、主人に仕えることは神に仕えることを意味し、そうすれば死んでから天国に行けるということだ

つたと言われています。特に大プランテーションでカネで雇われる伝道牧師は、プランターの利害を反映せざるを得なかつたようです。

(2) 人種分離制度と黒人教会の成立

ところが南北戦争後になりますと、黒人教会(Black Church)というのが南部で成立してまいります。黒人教会の起源は、奴隸制時代の北部にあります。それは要するに、南部では伝統的に黒人と白人の接触が非常に密であると同時に、白人は黒人の反乱を恐れていましたので、黒人だけで集まつてきちつとした教会を作るというのがなかなかできません。ところが、奴隸制時代の北部ですと、自由黒人(Free Negro)という奴隸でない黒人が、大都市のスラム辺りに密集して住んでいるわけです。その人たちが黒人教会というのを作り始めたと言われています。三大メソジストのアフリカン・メソジスト監督教会なども、一七九〇年代にフィラデルフィアで作られたもので、それがずっと小規模ながら続いて、南北戦争後急速に南部で勢力を拡大していくのです。

なぜ南部で急速に黒人教会というのが成立したかといいますと、それにいちばん貢献したのは人種分離法 Jim Crow Law の成立です。これは、一八九〇年代から一九〇〇年代にかけて南部のすべての州で成立し、黒人と白人が一緒の場で生活してはいけない、たとえばトイレは別、手洗いも別、乗り物も別、公共の場に黒人は入つてはいけないとか、とにかく人種ごとに生活空間を分けるようなそういう法律が成立します。そうしますと、黒人はこれまで通つていた白人の教会に通えなくなりまして、黒人教会というのが成立せざるを得なくなるわけです。黒人教会は人種分離法の産物であることは明らかです。ところが、黒人教会というのはやはり維持費がかかることがありますし、それなりに牧師と言いますか教会の指導者を育てなければなりませんので、なかなか黒人だけではやつていけない。その時に北部の慈善団体とか、あるいは北部のいろいろなプロテスタント系の団体が積極的に入つてきました。南部の教会に支援活動をやります。彼らはセミナリオ・神学校なども作つて、黒人の牧師を養成しました。

(3) 南部の黒人教会の特徴

次に、第二次世界大戦以前の黒人教会の特質についてお話しします。第二次世界大戦までと時代を限定するはどういうことかと言いますと、その時代までは、黒人の約九〇%は南部に、しかもかなりは農村地帯に住んでいたからです。結論から先に述べますと、その当時の白人教会と比較した場合の南部の黒人教会の特徴は、熱狂性ないしは陶酔性と保守性であつたと言われています。

黒人教会の保守性というのは、一つは南部の黒人教会は北部の白人の団体から資金を援助してもらっているので、白人の理事などしそう見に来るわけで、教える内容まで細かく指定していったりします。教える内容は基本的には奴隸制時代に黒人奴隸に教えていたのと同様のものだったようで、「主人に仕えよ、秩序を守れ、酒を飲みな」というようなことが中心になりました。

それからもう一つの「熱狂性（陶酔性）」はどういうことかと言いますと、奴隸制時代の黒人は一方では白人の

教会に通っていましたが、既に紹介しましたように、もう一方で黒人だけの秘密の教会ないしは「見えない教会」(Invisible Church)に通っているわけです。白人が来ない森の中とか沼地・湿地帯とかで開催される教会の特徴は、熱狂性なり陶酔性であつたと言われています。ところが、南北戦争になって教会が公に認められるようになりますと、しかも人種分離法に従つて黒人は黒人だけの教会を作らざるを得なくなりますと、黒人は秘密の集会を開かずに正式の教会に行けるようになります。しかしそれと一緒に、その正式に設立された教会に、「見えない教会」に特徴的であつた熱狂的な雰囲気がそのまま持ち込まれてきます。ですから、黒人教会の大きな特徴であるそういう陶酔性とかそういうものが、ここに出現していくようになるわけです。要するに、「見えない教会」に特徴的であつた「陶酔性」が制度化された教会に持ち込まれ、それが黒人教会の特質になつていくということです。

それからもう一つ、教会の指導者を育てられなかつたのも原因です。これはヨーロッパの場合もアメリカの白

人の教会についても似たり寄つたりの状況のようですが、黒人教会の牧師もほとんど字も読めないのが普通で、聖書の知識もほとんど持つておりません。ですから、牧師が教会に来た会員を指導しようとしても、そもそもそ

ういう専門的な素養も持つておりませんので、大体ほとんどが歌つて踊る黒人教会にならざるを得なかつたようです。参加者を指導するというレベルでは全くなかつたわけです。南部に成立した黒人教会とは、概してこういう内容のものだったようです。

要するに制度化された教会に陶酔性が持ち込まれたわけですが、しかし補足しなければならない点があります。南部の黒人たちがこのようないくつかの黒人教会に通い始めたと言つても、彼らは依然として白人教会の伝統、すなわち牧師の説教が中心で、静かさと厳肅さで特徴づけられるそのような伝統を引きずついていたわけで、陶酔性もこの伝統によつて抑制されていましたという点です。

教会に通つていましたが、既に紹介しましたように、もう一方で黒人だけの秘密の教会ないしは「見えない教会」(Invisible Church)に通つてゐるわけです。白人が来ない森の中とか沼地・湿地帯とかで開催される教会の特徴は、熱狂性なり陶酔性であつたと言われています。ところが、南北戦争になって教会が公に認められるようになりますと、しかも人種分離法に従つて黒人は黒人だけの教会を作らざるを得なくなりますと、黒人は秘密の集会を開かずに正式の教会に行けるようになります。しかしそれと一緒に、その正式に設立された教会に、「見えない教会」に特徴的であつた熱狂的な雰囲気がそのまま持ち込まれてきます。ですから、黒人教会の大きな特徴であるそういう陶酔性とかそういうものが、ここに出現していくようになるわけです。要するに、「見えない教会」に特徴的であつた「陶酔性」が制度化された教会に持ち込まれ、それが黒人教会の特質になつていくということです。

それからもう一つ、教会の指導者を育てられなかつたのも原因です。これはヨーロッパの場合もアメリカの白

〔3〕 北部への移動と黒人教会の変質

(1) 黒人教会の権威の失墜

これまで南部についてお話ししてきましたが、二十世紀になりますと、黒人の世界にも大きな変化が生じてきます。つまり、黒人の北部への大移動が始まるからです。一九一〇年代に第一次世界大戦が勃発しますと、北部のほうで工場労働者が不足します。この時に、シカゴとかデトロイトとかいった北部の大都市に、工場労働者として何十万人が移動します。しばらく途絶えますが、第二次大戦から朝鮮戦争あたりにかけて最大規模の移動、四百万人から五百万人が移動します。それにもなつて、教会が非常に変わったと言われております。

南部ではこれまで申しあげてきました体制が、一九五〇年代、六〇年代まで続きます。ところが北部のほうではちょっと事情が違つております。南部から北部に移住して来る黒人は単身が普通で、家族を持つていません。そして、移動したところに秩序も全然ない、相互扶助とかいろいろな組織もない、教会もない、そういうところ

で黒人が都市部で暮らすわけです。何しろ、その当時の南部の黒人というのは風呂に入る習慣も持っていない、スプーンとかフォークで食べる習慣もない、またほとんど裸足で生活するというのが普通でしたので、そういう黒人が北部にやって来ますと、カルチャーショックを受けたと言われています。

北部の大都市に同郷者を中心には「第一のムラ」ができる
ますが、それにしても安心して身を寄せるところがない
わけです。北部にももちろん黒人の教会というのはある
ますが、教会の会員数が桁違いに多く、たとえば千人と
か千五百人を越すような大教会になっています。ですか
ら南部からやつて来た黒人はそういうところに馴染めな
かつたと言われています。というのは、南部のほうでは
教会は百人とか百五十人とかその程度の規模のものが多く
あつたため、だれか礼拝に欠席すると、牧師が「どうし

黒人中産階級の絶大部は牧師たるだと言われています。要するに、農村地帯ですので職業の専門分化が全然ないわけです。そういう停滞的な社会の中では、聖職者というものは社会的地位も高く、所得も高い職業です。ですから、出世しようと思つたら南部ではみんな聖職者になつたわけです。ところが、北部にいきますと、いろいろな職業があつて職業選択の自由があり、所得も高くなります。それにともなつて、聖職者の権威も失墜せざるを得ません。

(2) 黒人新興宗教の台頭

は規模が非常に大きくなりまして、会員と牧師との接触がなくなつていきます。とにかく、南部から移住して来

教が台頭してくる十分な素地があつたわけです。教会としては大都会に放り出されカルチャー・ショックに苦しんでいる人々の要求に応えなければなりませんし、またそのことが黒人の教会離れをくい止める方法でもありますとした。たとえば神聖教会 (Holiness Church) や聖靈教会 (Spiritualist Church) などは、信者が教会に集まりますとそこで熱狂的に歌いだして陶酔したと言われており、南部以上にもつとその点を派手にしたと言われています。たとえばフライデル・ファイアのアイダ・ロビンソンなど

スピリチュアリスト・チャーチもほとんど同じで、南部の黒人教会に比べますと儀式性が薄れています。醉性がもつと高まっています。

また教会音楽という点に注目してみますと、黒人教会では以前は抑制がきいた黒人靈歌が歌わされていました。しかし二十世紀の前半になりますと、北部の教会ではもつと情緒的なゴスペル・ソングが盛んに聽かれるようになります。ゴスペル・ソングは都市の黒人を教会に引き戻すのに有効であったからと言われています。

は、神聖教会の会員になる条件として、神との交わりの経験、要するに神懸かりり的な経験を要求したそうです。北部で発生した黒人の新興宗教は、概してそういう側面

を非常に強く持っています。ただ教会に行つて説教を聞くとかいうのではなく、信者のほうが情緒的にもつと積極的にコミットしていくような、そういう教会になるわけです。そして、だいたい教祖が現人神になりまして、「自分は神である」と宣言するのが多かったようです。ハーレムで信者を大勢獲得したディヴィヴァイン神父もそうで、彼は絶対的な権限を持つていたと言われています。

また、聖職者の権威の失墜が生じます。南部の方では、黒人たちはなんとか吸収しないといけないという動きが働きまして、そういうところから黒人教会の質がずいぶん変わつていったようです。

また、黒人の要求に教会が対応できなくなり、教会に人が集まらなくなります。逆に教会としては、都市部に集まつて黒人中産階級の約半数は牧師だったと言われています。安泰するに、農村地帯ですので職業の専門分化が全然ないわけです。そういう停滞的な社会の中では、聖職者といつのは社会的地位も高く、所得も高い職業です。ですから、出世しようと思ったら南部ではみんな聖職者になつたわけです。ところが、北部にいきますと、いろいろな職業があつて職業選択の自由があり、所得も高くなりります。それにもなつて、聖職者の権威も失墜せざるを得ません。

(2) 黒人新興宗教の台頭

以上の指摘からわかりますように、北部の大都市では従来の黒人教会には満足できない人が大勢おり、新興宗教の黒人教会に比べますともっと儀式性が薄れており、陶酔性がもつと高まつております。

また教会音楽という点に注目してみると、黒人教会では以前は抑制がきいた黒人靈歌が歌わっていました。しかし二十世紀の前半になりますと、北部の教会ではもつと情緒的なゴスペル・ソングが盛んに聴かれるようになります。ゴスペル・ソングは都市の黒人を教会に引き戻すのに有効であったからと言われています。

ただ北部の新興宗教について言及する際、補足しなければならない点があります。南部から移住して来た黒人には酒や麻薬で身を持ち崩す者が相当多かつたようです。ここで紹介しました新興宗教はいずれも性道徳、飲酒、喫煙、麻薬などには非常に厳格でした。都市では黒人の若者はしばしばギャングに入ったりしますが、新興宗教の黒人教会は、黒人の不良化を阻止するのにはかなり貢献したようです。現代ですと、ネイション・オブ・イスラムがそれに該当します。

〔4〕 黒人教会の革新運動

(1) 公民権運動と黒人教会

以上述べてまいりましたことは、教会の質は二十世紀の前半に北部で変化したという点です。ところが黒人教会の内実が本当に問いただされてくるのは、実は一九五〇年代からです。南部では一九五〇年代に公民権運動が台頭してまいりますが、この運動の担い手になったのはマーティン・ルーサー・キング二世に象徴される牧師の集団で、彼らは黒人社会の中で指導層の中核をなしていました。

黒人社会にも僅かながら中産階級が形成されますと、都市の黒人教会は財政基盤も安定し、牧師の収入も増えてきます。したがいまして牧師の一世なり三世になりますと、経済的に不自由のない生活をおくつたり、大学や大学院に通う子弟も出現し、インテリ層も登場します。キング牧師や彼の腹心と言われたアバナシー牧師などは、その典型です。

はアフリカの伝統を継承していると論じるようになります

した。しかしキングの思想的位置を定めることは、この場合は荒削りであり、それよりは寧ろ彼が主として活躍した黒人教会の伝統の中に位置づけるべきであると思います。この観点から見ると、キングは南部の黒人教会の伝統をまるごと継承したのではなく、当時にあつてはそれなり批判的でした。

(2) 黒人神学者ジエイムズ・コーンを中心に

またこの点と関係してきますが、南部の公民権運動の中心的な担い手は黒人牧師であつたため、黒人牧師は全体的にリベラルな立場をとつていたと想像されがちです。しかし、実はそうではありません。世代交代や公民権運動の経験を通して、黒人牧師の考えは少しずつ変わつていきましたが、彼らは人種差別に反対して団結できます。しかしながら、必ずしもそうではありません。したがつたかというと、必ずしもそうではありません。したがつて公民権運動の指導者は一方では白人社会からの反撃と

聞いながら、それと同時に他方では、黒人教会の保守的な体質と向かい合わざるを得ませんでした。保守的な黒人社会から支持を獲得すること、むしろこの方が難しい

る大都市ではなく小規模の都市です。そして公民権運動の闘争の舞台になったのも、この種の都市です。第二点は、黒人文師の世代交代です。黒人の都市居住者が増え、

ともなつて都市の黒人教会の影響力が強まつていつたことです。ただ都市と言いましても、それは北部に見られ

この黒人牧師の資質を考える上で忘れてはならない点が二つあります。第一点は、一九世紀末頃から南部でも

集団で、彼らは黒人社会の中でも指導層の中核をなしていました。

年代からです。南部では一九五〇年代に公民権運動が台頭してまいりますが、この運動の担い手になったのはマー・ティン・ルーサー・キング一世に象徴される牧師の

以上述べてまいりましたことは、教会の質は二十世紀の前半に北部で変化したという点です。ところが黒人教会の内実が本当に問い合わせられてくるのは、実は一九五〇年代後半のことである。

ズ・ピューティフル」という言葉はその価値観をひつくり返し、自分たちの文化や皮膚の色が黒であるということは全然悪いことではなく、コンプレックスを持つようなことではないのだと宣言したわけです。つまり黒人らしさを全面的に肯定する、そういう運動あるいは発想が生じてくるわけです。この動きと呼応してキリスト教解釈にも、大きな変化が生じます。事情は、以下の通りです。

師などはその典型です。このような背景から、伝統的な保守的な牧師とは資質を異にする新しいタイプの牧師が誕生するわけです。キング牧師は黒人教会に特有の陶酔的な雰囲気を嫌つておりましたし、また彼は説教こそ牧師の最大の任務と考えていたため、説教の準備に多大な時間を費やしたこととは、周知の通りです。一世代前のキング研究では、E・H・エリクソンの学説が流行していたこともあり、キングの青年期の読書体験が研究され、彼の思想にニーバーやバルトなどの白人神学が大きな影響を与えたと紹介されたわけです。ところが最近ブラック・ナショナリストの研究者が増えてきますと、白人神学がキングに与えた影響は小さく、キングの思想は南部黒人教会の伝統、ひいて

南部を席巻した公民権運動も一九六〇年代後半から衰退し始め、特にキング牧師が暗殺されると、そしてまた白人との協調を拒否するブラック・ナショナリズムが異

人青年たちを魅了し始めると、黒人の青年神学者たちは「黒人が白人と共有しているキリスト教とは何なのか」という大問題に突き当たります。というのは、一九六〇年代ぐらいまでは南部には人種分離があり、また北部にも目に見えない人種差別が厳しかったわけですが、その人種差別なり人種分離を正当化するのに使われたのがキリスト教だったからです。黒人の劣等性というのは、聖書にもちゃんと書いてあることだと言つて聖書を持ち出して、人種差別・人種分離を正当化する。それが一九六〇年代まで続いているわけです。

公民権運動を人的に支えたのは黒人牧師であり、思想的に支えたのはキリスト教なのですが、しかしそれと同時に、キリスト教はアメリカ社会の中では人種差別を正当化するイデオロギーとして機能したわけです。ですから黒人神学者の中には、「支配の道具として機能していったキリスト教」とは異なる、そうではないキリスト教というのもあるのではないかと考える人も出てまいります。

たとえばジェイムズ・コーンの黒人神学 (Black

Theology) も、そういう背景から生まれてきます。日本ではアメリカ版解放の神学ということで、彼の翻訳本が多数出版されています。コーン自身ももともと南部の生までも、とにかく子供の頃から、白人にはちゃんとエチケットを持って接しなさいと植えつけられている。そのコーンが神学校に入るために北部にやって来るのですが、人種差別がないと思ってきたその北部での人種差別は、ある意味ではもつとひどかつたわけです。キリスト教を教える神学校では人種差別はないだろうと思つてみると、実は神学校での人種差別もひどく、当時非常に世間を騒がせていた公民権運動については一度も議論されず、ちょっとでもそういう人種関係のことを言うと、もうすごくいやな目で見られて進学停止とかになつたようです。

ですから、アメリカの神学とはこんな偽善的な神学なのかということを、コーンは身をもつて経験する。大学院ではバートの神学で博士号を取得していますが、そういうテーマにしないと、要するに博士号を出してくれない。人種的な問題を神学校で出すとたんに拒否されます。

代にあって神は黒い皮膚をしているのだということを言うわけです。

コーンはアメリカの白人社会で伝統的に唱えられてきたキリスト教に反旗を翻し、「黒人的な」キリスト教を発掘しようとします。「黒人的な」キリスト教のルーツを従来のように白人教会のそれやヨーロッパ神学に求めるのでなく、恍惚状態や陶酔状態で特徴づけられる南部の教会に見いだしたり、また極端な黒人神学者は類似の宗教的雰囲気を持つているアフリカの諸部族に求めたりもします。

ともあれ、黒人神学者コーンが徹頭徹尾批判しているのは、白人のキリスト教の偽善性と同時に、そのキリスト教のイデオロギー性に無自覚・無批判でいる黒人教会です。彼にとっての変革の対象は、先ずもつて黒人教会であつたのです。コーンを含め黒人教会の革新派の神学者たちは、伝統的な黒人教会を正面からこのように批判した結果、黒人教会からも門戸を閉ざされ、孤立化していくことは言うまでもありません。

いろいろな宣教活動をしていますが、宣教活動の対象にしたのも、すべて抑圧された貧しい人々だったわけです。ですからキリスト教というのは、まず第一に抑圧あるいは差別された人々に手を差し伸べるような、そういう宗教であるべきだと結論し、コーンはそこを出発点にする。ですからイエスというのは現代のアメリカにあっては黒人に手をさしのべる存在で、イエスもまた黒人でないといけないのだということになります。黒人という言葉で抑圧された人々を象徴させているわけですけれども、現

[5] イスラム系黒人教会の成立

南部で発展した黒人教会は北部の大都市に移植されたときに変質し、教祖の現人神性と信徒の熱狂性を高めた」とは、既に〔3〕で示したとおりです。これらの新興宗教はいずれも南部の黒人教会のある側面を強調していると言えますが、しかし南部の黒人教会の伝統とは異質な、もっとと独特的な宗教も出てまいります。アメリカ・ムーラ人科学教会 (Moorish Science Temple of America)、ネイション・オブ・イスラム (Nation of Islam) (以下、ネイションと略す)などは、いずれもタルムードを聖典としているイスラム教の教団です。

特にネイションはキリスト教の持つイデオロギー性にきわめて自覺的な宗教であるため、白人社会への敵意を赤裸々に表明します。コーンはキリスト教の黒人教会にとどまりながら、その保守性を内側から批判した人物の一人ですが、ネイションは伝統的な黒人教会の枠から外飛び出して、外からそのイデオロギー性を批判してい

ると言えるでしょう。ネイションは白人社会を批判する言辞の激しさの故に、しばしば過激な集団とレッテルを貼られます。しかしぱイションが白人社会を糾弾したり、あるいは黒人の団結や黒人の優秀性を強調するのは、それをバネにして、都市の黒人に生きる支えなりプライドを取り戻させようとしているように見えます。いずれにしろ、黒人に意識革命をせまる新興宗教であることには変わりはありません。昨年、首都のワシントンで百万人大行進という集会と行進が行われましたが、それを主催したのも、ネイションを率いるルイス・ファラカンという人物でした。

ネイションはマルコムXが活躍した一九五〇年代に発展しておりますので、最近の勢力拡大は第二期に当たります。しかしネイションそれ自体や、ネイションの歴史について述べようとすれば、それだけで一つの論文になるので別の機会に譲るとして、ここでは黒人とイスラム教の関係は今に始まつたことではなく、かなり古いんだということを表している一つのエピソードを紹介して、話を終わりたいと思います。

少し前に『African American Christianity』という本を読んでいまして、アフリカから一八〇〇年前後に連れてこられた黒人奴隸の場合、その奴隸の一〇%はモスレムだったと指摘している論文に出会いました。南部のサウス・カロライナとジョージア州の海岸部の所に黒人が昔から住んでいて、そこに黒人のなかでいちばん古い伝統が残っていると言われています。白人の場合はアラチア山脈の地方にいちばん古い伝統が残っていますが、黒人ですとガラ地方、すなわちサウス・カロライナとジョージアの海岸部にある地域に、昔からの習慣・しきたりが残っていると言られています。ところは、最初は棉や米の栽培を行なわれましたが、すぐに土地が枯渴してそこは使われなくなり、そこに黒人が住みつき、ずっと外部との接触がなくて二百年ぐらい生きてくるわけです。ですから、言語関係の研究者というのは、大体アメリカ黒人の言葉のルーツをその辺を分析して研究しているようで、事実、その地方の黒人の言葉はアフリカの言葉と非常に近いと言われております。

ともあれ、その地方に住んでいた白人の手記があつて、

それを読んでよくと奴隸の生活様式というのがずっと書かれていまして、彼らは一日三回あることは五回、メックのほうに向かってお祈りをする。食物も豚肉を食べなくて、肉の配給も種類が全然違う。そして、奴隸たちが食べていて食事も回教徒が食べるような食事が多かつたと言われております。

黒人のイスラム教と言いましても、私にはどうもピンとこなかつたのですが、しかし歴史をさかのぼつてアフリカにおけるイスラム教との勢力分布を参考にして冷静に考えますと、奴隸制の時代から、アメリカにはイスラム教徒の黒人奴隸が多数いたとしても、ちつとも不思議ではないわけです。上記の論文が出している数字にどれほどの信憑性があるかは別にして、アフリカから連れて来られた黒人イスラム教徒が植民地時代の初期からアメリカには居たという可能性は高いわけです。それが日本でいう隠れキリストンのようなかたちでずっと生き延びて、それが歴史の合間合間にときおり噴出してくるのかかもしれません。

一九三〇年代、一九五〇年代にもあり、そして今まであるわけです。ですから、ブラック・モスレムの運動は、アメリカの黒人が自覺的に黒人であり続けようとした場合には、いつも行き当たらざるを得なかつた宗教のようです。

(まつおか やすし・熊本県立大学教授)